

ピーター・パン (PETER PAN)

2004(平成16)年3月2日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督＝P.J. ホーガン／出演＝ジェレミー・サンプター／ジェイソン・アイザックス／レイ
チェル・ハード＝ウッド／リュディヴィーヌ・サニエ (ソニー・ピクチャーズエンタテイン
メント配給／2003年アメリカ映画／113分)

…… 2004年は、ピーター・パンの初演された1904年から記念すべき100周年の年。そんな年に、アニメではなく人間の、それもはじめて少年がピーター・パンを演ずる映画が登場した。決して大人にならないピーター・パン、舞台はネバーランド、そしてそのライバルはフック船長。おなじみの冒険物語だが、何せ鑑賞する側が大人になりすぎた……？

ピーター・パン初演100周年

ジェイムズ・マシュー・バリ原作の『ピーター・パン』が、ロンドンのデューク・オブ・ヨーク劇場で初演されたのは、1904年12月27日とのこと。したがって、2004年の今は記念すべき100周年の年。そこで英国議会貴族院では、何と大層なことに、「ピーター・パン100周年の宣言書」が宣言された。この宣言書は、イギリスにとって、『ピーター・パン』はこれ程長く広く国民に愛されてきた物語だということを端的に示している。

ピーター・パンの基礎知識

ピーター・パンは13歳。そして、永遠に13歳のままで、大人にならない少年。また、このピーター・パンは自由に空を飛ぶことができる少年。これが、ジェイムズ・マシュー・バリが創造した名作『ピーター・パン』の基本設定だ。

ピーター・パンが住む(?)のはネバーランドという、どこにもない国。そこにはピーター・パンの友達の妖精がたくさんいるし、巨大ワニもいる。そして何

よりも、ピーター・パンの「宿敵」であるフック船長がいる。彼は、7つの海を支配する残忍な海賊船のボスだが、有名なのは、右手のカギ爪。これはピーター・パンとの闘いに敗れて、巨大ワニに手を食いちぎられたためだ。ピーター・パンが、人間の国から、13歳のヒロイン、ウェンディーとその弟たち2人を連れてネバーランドに帰ってきたところから、この映画の冒険物語の始まりだ。

以上がピーター・パンの基礎知識だ。

はじめて人間の少年がピーター・パンに

ピーター・パンは男の子だから、舞台でも映画でも当然男の子が演じていると思っていたら、それは大まちがい。今までの舞台では、すべて女の子がピーター・パンを演じていたとのこと。今回ピーター・パンを演ずる史上初の少年は、ジェレミー・サンプター。彼は既にいくつかの映画に出演している1989年生まれの男の子。空を飛ぶ少年はアニメでは簡単にできる。また、舞台では、ロープによる宙づりという仕掛けがはっきりしている。しかし映画のカメラの前で実際に人間が空を飛ぶシーンを演ずるのは大変。また少年ながら、フック船長（ジェイソン・アイザックス）と剣で闘う場面がたくさんあるため、それも大変！ まあ若いから、何でもできるのかな……。

日本でも大人気のミュージカル『ピーター・パン』

日本でミュージカル『ピーター・パン』が初演されたのは、1981年8月の新宿コマ劇場。これは大好評で、連日満員、追加公演が決定されるという当時としては珍しい現象になったほど。初代ピーター・パンを演じたのは、あの元(?)アイドルの榎原郁恵。そしてフック船長は金田龍之介。榎原郁恵は1987年8月までの6年間この役を演じ続け、その後沖本富美代・美智代姉妹(2代目)、YASUKO(相原勇、3代目)、宮本裕子(4代目)、笹本玲奈(5代目)、中村美貴(6代目)という合計6代の「ピーター・パン女優」が誕生した。

ヒロインは新人女優

ピーター・パンと一緒に「子供の世界」に入りながらも、恋の話をしたり、家

で待つ両親のところへ帰らなくちゃと考えるしっかりした女の子がウェンディー。ピーター・パンのような「永遠の少年」ではなく、しっかりと夢と現実を見据えたそんなチャーミングな女の子を演ずるのは、この映画がデビュー作となった1990年生まれのレイチェル・ハード＝ウッド。愛とか恋とかの感情には全く気づかないピーター・パンに対して、13歳の女の子のウェンディーはその恋心を打ちあけようとした。このような「男女関係のモツレ」(?)が出てくると、それまでの良好な人間関係(?)がややこしくなってくるもの。もっとも、それがこの原作の1つの狙いでもあるのだが……。そんな「男女関係のモツレ」(?)はピーター・パンの空を飛ぶ能力にも影響したから大変……。フック船長の「ウェンディーが大人になると、その時そばにいるのはピーター・パンではなくウェンディーの夫だ」、「ピーター・パンは1人ぼっちだ!」との言葉に傷つき、打ちのめされたピーター・パンは、決闘の場面で次第に不利に……。さあ、われらのピーター・パンは挽回できるのか……?

ピーター・パンの夢物語を楽しめるのは何歳まで……?

確かに映画はそれなりに良く出来ている。またストーリーもそれなりに面白く、楽しく、そしてスリリング。映像もきれいだし俳優陣も上出来。しかし問題は、これを観る側の、夢物語にどこまで楽しくスナナリと入っていけるかという「感性」。私は基本的にアニメが好きではないので、最近多くのアニメの話題作があっても、それは観ていない。だから、この『ピーター・パン』がアニメ作品なら遠慮していたはずだが、人間の俳優が演ずる映画なので観ておこうと思ったもの。しかしやっぱり、限界あり、か……?

「今日は楽しく、いい映画を観ることができてよかった!」という満足感や充足感は残念ながら得られなかった。試写会の席は約3分の2の入りだったし、そのほとんどは大人の客だったが、果たしてホントにこの夢物語の世界に入りきって楽しめた人はどのくらいいたのだろうか? やはり年はとりたくないもの。そして気分は、いつまでも少年のままでもいいものだ……。

2004(平成16)年3月4日記